

を得るため

3. 概 要

1. 煮沸液浸漬処理
2. 木酢酸鉄：水＝1：60の溶液に浸漬
3. neosilox 60%溶液にて漂白後
木酢酸鉄：水＝1：40の溶液に浸漬
4. 木酢酸鉄：水＝1：20の溶液に浸漬
(浸漬時間はいつも15分間)

4. 成 果

木酢酸鉄：水の割合を1：60，1：40とした場合はヤ、着色においてムラがあり薄目の仕上りとなつた。又neosiloxにて漂白したものは大体において良い結果が得られた。1：20の割合のものは濃度、塗理の生かし方とも非常にすぐれている。

家具として使用するため充分に利用価値ありと思はれる結果を得た。

(9) 台湾桐の着色試験

1. 担当者

工業技師 山田式典

2. 目的

現在、その利用範囲のきわめてせまい、タイワン桐桧板の利用度拡大、高級家具等々の利用を計る意味において今回はさしあたり洋酒棚内側化粧用として利用出来得るか否かにつき検討するために着色試験を行つた。

3. 概 要

染色方法

材料	1.5 g
染料	3% (0.045 g)
助剤	10% (0.15 g)
浴比	1：50
温度	60～80 (°C)
時間	60 min

左の条件でイエロー、オレンジ
ブラウン、レッド、ブルー、グレー
ブラックの各染料を試料各3点に
使用染色を行つた。

4. 成 果

染色の結果ブラック、ブラウン、イエローの最も濃度の高いものは充分使用し得ると思はれる結果を得た。

(10) 桜材の人工乾燥における含水率低下に伴う木材の収縮状態について

1. 担当者

工業技師 山田式典

2. 目的

木材が乾燥するにつれて生ずる収縮については、一般にセウイ方向に対しては、問題がなく、切線方向対半径方向については、2：1位の割合で収縮され

ているものとされている。この一般説の検討と、更に木材が、乾燥するにつれて、含水率の低下につれておこる収縮の割合について、検討を加えることを目的とする。

3. 概要 木材人工乾燥機と、電気定温乾燥器の両機器を使用前者においては間断作業につき毎朝の含水率と、収縮率を試験片において測定、後者は105°C恒温と、60°C恒温24時間乾燥の結果を測定した。
4. 成果 実験の結果、サクラ材における収縮も多少の差はあれ、大略、一般の説通りの収縮の状態が観察される。又、含水率の低下に伴う収縮については、繊維飽和点時における収縮の割合が最大であることが認められこの結果、実察の乾燥においては欠点防止の意味からも木材変形等、発生時の、機内湿度状態を充分注意することがうなづける。

(1) モニン乳剤の防黴試験

1. 担当者 工業技師 山田 式典
2. 目的 竹材に対する、防黴薬剤は多種類あるが効果、価格の点で使用目的も異なってくる。今回は、フェニールマーキエリツク、ジオクチルスルホサクシネートを主剤とせる本剤について、竹材に対する防黴薬効試験を目的とする
3. 概要 本県産モウソウチク、3年生の割竹と、ヒゴを薬液濃度0.0 0.1 0.2 0.3 0.5 1.0 %液に浸漬後、Penicillium を接種、湿度90%温度25°Cにて培養、カビの発生具合によつて、その薬効を検した。15日間培養この結果0.2%以上の濃度については、カビの発生は認められなかつた。
4. 成果 竹材に吸収せられた薬液の残効性については早急に、結論は出されぬとしても、現段階においては、充分使用に耐え得るものと考えられる。

(2) 成型椅子の研究および成型治具の研究

1. 担当者 工業技師 永吉 忠之
 〃 末吉 光雄
2. 目的 昭和34年度本場に設置された西独アドルフフリッツ社製の成型プレス機を利用して椅子の試作を試みた。此のプレス機は特殊な構造で従来雄型、雌型を必要としたがどちらか一方の型のみで成型可能である。
3. 概要 1. 治具
 治具は熱の伝導性、耐久性その他の条件より、金属製であることが好ましいが、量産の場合にはともかく、今回は木製のものを使用した桂材(含水率10%)を積層、および枠組として作成